

COLUMN — 株式会社DnD

AI活用

"自社専用AI"をつくる選択肢

Difyで社内向けAIアプリをノーコードで
構築する考え方

株式会社DnD / dnd-inc.jp

汎用AIツールの「合わない」はなぜ起きるのか

ChatGPTやClaudeは汎用的で優秀ですが、自社固有の情報——製品仕様、社内規程、過去の見積り履歴、顧客対応マニュアル——を知りません。「自社の商品を聞くとでたらめを答える」「毎回同じ業務説明をしなければならない」という体験は、まさにこの"知識の壁"から来ています。

対策として自社データを都度貼り付けたり、プロンプトに盛り込んだりする方法はありますが、継続・共有・標準化が難しく、個人のスキルに依存しがちです。この問題を解決するのが「AIアプリを自社でつくる」というアプローチです。

DifyはAIアプリを「つくる」ためのプラットフォーム

Dify（ディファイ）は、LLM（大規模言語モデル）を使ったアプリケーションをノーコードで構築・公開できるオープンソースのプラットフォームです。自社サーバーへのインストール（セルフホスト）が可能なため、社内文書などの機密データを外部クラウドに出さずに運用できます。

- **LLMの接続**：Claude・GPT-4・Geminiなど複数モデルを管理画面から切り替えられる
- **ナレッジベース**：PDF・Word・テキストをアップロードしてAIが参照できる知識として登録
- **フロー設計**：「質問→検索→回答生成→出力」の流れをブロックを並べて視覚的に設計
- **公開・埋め込み**：URLで共有したり社内ポータルに埋め込んで利用可能

「AIを選んで使う」から「自社に合ったAIをつくって運用する」へ。Difyはその移行を現実的にするツールです。

社内でよく使われるDifyのアプリ構成3パターン

① 社内FAQ・規程ナレッジBot

社内規程集・就業規則・経費申請ガイドなどをナレッジベースに登録し、「有給はいつから取れますか？」「出張費の上限は？」といった問いに答えるBotです。総務・人事の問い合わせ対応を減らしたい企業から評判がよいパターンです。

② 製品・サービス仕様の案内Bot

製品カタログ・仕様書・価格表をナレッジとして持たせ、営業担当が「この型番の在庫対応範囲は？」と聞くと即座に回答する社内アシスタントです。仕様書が更新されたらナレッジを差し替えるだけで最新情報が反映されます。

③ 定型文書の生成フォーム

「案件名・予算・要望を入力すると、提案書の叩き台が生成される」「顧客の課題を入力すると、提案メールの下書きが出てくる」——こうした入力フォーム型のAIアプリもDifyで構築できます。

ノーコードで始める3つのステップ

ステップ1：クラウド版で試す

まずはdify.aiの無料プランに登録し、操作感を確かめます。PDFを数枚アップロードしてナレッジベースを作り、チャットで質問してみるだけで概念をつかめます。この段階では社外秘文書は使わず、公開資料や社内公開してよい情報で試しましょう。

ステップ2：使うシーンを1つに絞る

最も問い合わせが多く・属人化している業務を1つ選びます。最初から複数の機能を盛り込まないことが、早期に成果を出すポイントです。

ステップ3：本番環境を整えてナレッジを充実させる

試用で手応えがあれば、セルフホストへの移行またはチームプランへのアップグレードを検討します。社内文書を整理してナレッジベースに登録し、実際に使う担当者のフィードバックを反映しながら精度を磨きます。

導入で気をつけておきたい3つのポイント

- ・ **ナレッジの品質が精度を決める**：入力文書に矛盾・欠落があると回答も不安定になります。情報整理を先行させることが重要です。
- ・ **AI回答の確認ルールを決める**：重要業務は「AIの下書き→人が確認→送信」の役割分担を設計してください。
- ・ **LLMの利用費は別途かかる**：DifyはOSSですが、APIを呼び出すたびにコストが発生します。月数千円～数万円程度から始める企業が多いです。

株式会社DnDでは、社内AIアプリの設計・構築・運用支援を行っています。

<https://dnd-inc.jp/contact.html>